

「イスラームと所有権」

(抄訳)

マフムード・ターレガーニー

## 信仰と宗教的理念の光の下での経済

イスラームは、社会的経済的現象の源泉は人間霊魂であるという事実に着目している。人間霊魂は、思惟と性情と性向と本能からの複合体である。社会、経済および階級的関係の様相はこれら心理的事象の反映と顕現の複合体である。心理的事象は一般に二つの側面がある。すなわちその一つは、人間の識別能力と特性に属する恒常的な基本的要素である。もしもこれらの要素が人間からとり去られると、人間は通常ある姿とことなった様相を呈することになる。これらの要素をあらゆる人間があらゆる時代や環境においても共有しているのである。すなわち、学的真理への要求（原因と目的の発見）、実践的真理の要求（権利を有する者のために正義と権利をつくり出すこと）、完成の追究（知識の進歩と能力の保存と存続）、人間の情操（愛、慈悲、寛容）、財物への愛（快樂、欲望を保障する手段もしくは権力を保障する手段への愛）のようなものが恒常的要素である。もう一つは、人間の心理的事象の恒常的でない要素である。それはすなわち、これらの諸要素と心理的能力との複合の様態であり、そのおのおのの部分の他の部分に対する発現と影響力と支配力の様態である。この様態と複合は、社会的環境、経済的環境および諸々の伝統に応じて変化し、一定しない。

## 社会の形態と歴史の運動

この観点によれば、社会の形態と歴史の運動の源泉は、人間ということになる。なぜなら人間の恒常的要素が環境を支配するものであるか、あるいは人間が社会環境、諸々の手段および経済様式に支配されているかのいずれかだからである。

(注1) 政府、文化、歴史的变化の発生の原因と論理構造 (falsafah) の解明のために、学者や歴史研究者が研究調査し様々の意見を発表している。歴史哲学は新しい学問の一つで進歩の途上にあるので、今のところ歴史のあらゆる側面を抱摂し、あらゆる場所におけるあらゆる時代の歴史と様態にあてはまるような普遍的絶対的抱括的結論には到達していない。この学問の到達したところのものは実証的結論であって、それはあるケースにあてはまるとしても歴史の過去と未来のすべてのケースに無条件にあてはまるものではない。

東洋と西洋の学者の証言によれば歴史を事実の記述ということから解放し歴史哲学および歴史的現象の原因の解明を实践した最初の人物はアシュビーラの人マーリキー派法学者アブー・ザイド・アブドゥッ=ラフマーン・ムハンマド・イブン・ハルドゥーン(ヒジュラ暦八〇八年カイロに没す)であった。イブン・ハルドゥーンは彼の有名な歴史序説の中で文化と政府の盛衰の原因の研究をしている。そして、最初に、文化と政府の誕生の最も重要な原因は精神と本性と身体の力であり、文化と政府の死と消滅は、これらの要素の分解であるという結論に達している。そしてさらに、荒地に生活する人々や遊牧民は砂漠の自然できびしい生活環境の中に生きていたので彼等の身体上および精神的能力は常に強く、部族連帯意識や民族意識は激しく、常に活気にあふれている、これに反し都市生活者は、便利で安楽な生活をしているので、常時、彼等の身体および精神の力は衰退の方向にある、このために彼等の文化と政府は消滅の危機にさらされているという結論に到達し、かかる論拠と信念にもとずいて、荒野の部族民や遊牧民が文化と政府を常に産み出すものとなっている。

歴史哲学者のある者は、地理学的状況や気候、自然、風土の影響により多くの注意をむけている、そして、これらのものが人間の性向や習慣や文化の決定要素だとみなしている。またある者は、人間の性向や習慣や文化の根源を心理的欲求であると考えている。フロイ

トおよびその学派は、潜在的欲求、とくに性本能によるところの欲求を重視している。近世の経済学者達は文化と社会状況は経済制度に依拠すると考えている。マルクスとその学説の信奉者達は、生産の要素と手段を社会と諸変化と人間の性向の唯一の源泉であり下部構造であると考えている。しかしながら、これら個々の要素や原因の影響に限定してしまうためには、それらの影響についてなされた調査や述べられた論証をもってしても、なんらの証明となるものもない。識者は直接間接の人間の意識や意欲の介入を認めている。マルクスの信奉者は彼等の特殊で、しかも広範囲な宣伝をもって事実上、被抑圧者階級の意識を覚醒させ意欲を強化しているのである。この実際的な方法は、階級的対立だけが効果や変動の源泉ではなく、人間が全面的に経済的要素の支配下にあるのではないということを説明の必要ない程に示している。

いかなる書物や思想よりも、歴史的な事象を述べているコーランの聖句は諸民族や諸国民の存続、滅亡、幸福、不幸の原因や誘因について着目している。コーランの視点によれば、諸国民や諸民族のもっとも影響力のある存続と滅亡の原因、およびそれらの進歩と崩壊の原因は指導（ヒダヤト）と迷妄（ダラーラト）であるとされている。指導とは、唯一神的世界観の信仰による思索、創造と生命に関する普遍的法の発見、善行と真理と福祉の実践であり、迷妄とは、これらのことからの逸脱である。コーランは、各人ならびに諸民族が真理と直なる道への指導によって力を得て、様々の恵みを持つことになり、他方、様々の能力や手段を持ち進歩した民族や国民も、預言者や正しき人々の呼びかけに顔をそむけ、みずからの誤った行きかたを続けるならば、生命の普遍的原理と真理の力の前に滅び去ってしまうことをしめしている。「汝はみななかったか、主がアードの民をいかにし給うたのか、立ちならぶ円柱のイラムを。あれほどのものはこの国にかけて作られたことはなかった。そして、谷間の岩を掘り込んだサムードの民。杭のぬしのフィルアウン。いずれも国中で横暴を極め、悪事をかさねてまわったが、ついには主が懲罰の笞を打ちおろし給うた。まことに主は見張りの塔にて見張り給う。八十九章、五～三節」。「いずれも彼等よりはるかに力の強い人々で、地を掘りおこし、今の人々よりはるかに栄えていたものであった。三十章、八節」、このような聖句はコーランの中に沢山ある。

神の指導に対する注意の喚起、および直なる正道にみちびかれた人々と、神の怒りに触れるかあるいは逸脱した道をあゆんだ人々に対する注意の喚起は、イスラーム教徒の日夜の礼拝と祈りの言葉の一部である開扉の章（称賛の章）の中に祈りの言葉として記載されている。

神による導きと迷妄の源泉は自由意志をそなえた人間の多様でかつ相対立する思想と諸要素である、したがって歴史の運動の基礎的下部構造は人間および人間的諸要素なのである。

事実、歴史を動かすもの（歴史の力学）は、人類の恒常的要素と不屈の精神の社会的状況や動物的快楽や欲望との対立、環境の様々の要求や快楽や諸諸の外的力との対立である。人間の優れた力と経済的要因やその附帯的現象および影響との衝突において、もし人間性が打ちまかされそれらに支配されるようになると、階級的対立が発生する。この対立が尖鋭化すれば、諸階級が共々消滅し、その影響にひきつづいて社会と文化も無の暗がりの中に沈みこんでしまうか、あるいは、はじめに支配し抑圧する階級、それから被抑圧階級が滅亡への道をたどってゆくかである。いずれにせよ、壮麗な建築遺構に対しまして彼等（支配階級）の抑圧と不正の宮殿に対し、「彼らが後に残した庭園や泉がどれほどであったことか。どれほどの畑、どれほどの立派な宮殿が。」<sup>(注1)</sup>という永遠の刻文、聖なる知の章句が読まれるのである。

(注1) ヨーラン 煙の章二～二十六章。

もしかりに、人間的原理が優位となって物質的要素や誘因を征服し排除してしまい、その結果、対立も運動も消滅してしまうのであれば、その結果はまた静止とそれに続く消滅<sup>(注2)</sup>である。なぜなら、感覚的快楽やその手段と所産の支配の結果は自己に執着すること（利己主義）になり、かつまた人間の物質面の無条件な支配の結果は、静止と個人の分解になるからである。人間の社会と生命の基礎は、個人の独立にもとづくと同時に社会の福祉と利益にもとづいているので、この均衡がなくなることは社会を分解させることになる。

存続と持続的発展の道は自己克服の源泉であるところの人間の原理と感覚的快楽や諸々の要求から生じてくる欲望の衝動（自己に諸々の手段を結びつ

けること)との間の均衡をつくり出し、一方が他方に対し優位にならないようにすることである。人間の相対立する二つの極の衝突によって精神的、物質的発達が停止することがなくなるのであり、個人と社会の力が前進するのである。

(注2) イスラム世界やインドにおいては、無責任で現世から遠ざかった、しかも労働と生産から分離した真理探究、精神と人間の力の強化の思想(神智学と孤往)が優位で支配的になったので停滞し、他の人々に征服されてしまい、生の競技場から身をひくことになってしまっている。

個人的衝動 — 利己主義と快楽・利益追求 — を感覚的、物質的要求や必要性がつけねにかきたて、しかも強化している。このために、個人の刺激のために他の動因は必要ではない。<sup>(注1)</sup>しかし、人間的原理にとっては有益で高度な教化訓練がなければならず、補強、強化して堅固な岩のように欲望の波の反乱を打ちほらいおさめなければならない。

有益で高度な教化訓練とは信仰と精神の矯整の領域に属しているが、これが人間的原理を強化することができるのである。「かれこそは文盲の者の間に、かれらの中から使徒を遣わし、しるしを読みきかせてかれらを清め、啓典と英知を教えられた方である」<sup>(注2)</sup>。その信仰は本性の意図(理性の根本的性質)と論理的理性の判断の対象とである心理的基盤を持っている。力への志向、完成の探究と完成との結合は最も重要な本性の動機づけとなるものであり、力の源泉と発生因の獲得は弁証的理性の最も欲するところのものなのである。

(注1) 潰滅に瀕している社会においては贅沢や快楽が様々の装置によって必要なものよりもより多く奨励されている。こうした方法によって個人の精神的な力が溶解していくのである。……「また、ある邑を滅ぼそうと思う場合には、まずその富裕な人々に命を

下す。すると彼らはいよいよ悪業にはしり、今度こそ、御言は実現して、あますところなく叩きつぶしてしまう。コーラン 十七章十七節。

(注2) コーラン、集会の章(六十二章、二節)。この聖句の中で、信仰の源泉である聖句の誦唱をもとにして聖典と叡智が教えられることが述べられている。

まさにこの本性上ならびに理性上の動機づけが理性的思索力と人間的資質と徳性の発現の源泉なのである。この完成に到るそれぞれの段階において、もしも停滞が起るならば反対の要因や動因が優位となり、人間的原理が征服され打ち負かされてしまうのである。こういう支配力から解放され発達を持続するためには、無限で絶対の完成と力への(たえることのない)信仰以外に道はないのである。イスラームの第一の信条の原理と唯一神的世界観(タウヒード)の教えの本質は、まさにこの絶対的力と完成への信仰なのである。この理念のみが、利己的思索から完成への思索と完成との結合への発展の源泉となりうるのである。そして、そのような信仰の所産として絶対的真理(神)のための所有と占有の権利についての信仰がある。神こそが、人間と存在者の本質に対し真に恒常的な占有権を持っている。そして、人間は神と創造物に対し責任を負うものである。このような見方に立てば、地球の資源や自然の恵みは、ある集団やある階級のためのもではなくなる。人類は所有する理性と管理の能力でもってそういうものに対し占有権を行使し、そういうものから利益をとり出すことができる。しかし、なん人も他者の占有と収益の権利を阻害する権利を持つことはない。あるいは人が計画と実行を通じて入手したものを、なん人も犯すことはできない。

コーランの聖句は神にとっての絶対的所有権、占有権、支配権、創造権、そして配剤権を明白に宣言し、またあらゆる被造物にとっての受益権(限定された占有権)を明白に宣言している。「そればかりか、天にあるもの、地にあるもの、一切を挙げてお前達の用に供して下さった」。(注1)「<sup>(注2)</sup> 汝らのために大地を置いて敷床となし」。「また大地はこれをすべて生あるもののために

（注3）  
うち据え給う」。

（注1） コーラン四十五章十二節。

同じ内容の聖句はくりかえしみられる。

（注2） コーラン二章二十節。

（注3） コーラン五十四章九節。

神の恵みと慈愛の源に結びつくことが人間をあのように高め、非常にその思想を啓発することができたがために、全ての被造物に対しまさにこの見方で接することになり、しかも、この見方をくりかえしてゆくことにより被造物に対する慈愛と善意のあらゆる泉が湧き出で行為にみなぎるようになるのである。  
（注3）

（注3） 「大慈、大悲」という神名をコーランの各章、聖句においてくりかえし唱え、また、礼拝の際にもそれをくりかえして、あらゆる行為の実行においてその規定をくりかえすことは、このような結果のためなのである。なぜなら言葉や単語のくりかえしが、真理の意味についての持続的な関心と希求の原因となり、さらに、それは徐々に人間靈魂の中に根を張り、枝をのばし、葉をつけるのであり、さらに正しき行為の果実はそこから生ずるのである。「善い言葉は善い樹のごとく、その根はしっかりと強く、その枝は天に伸びている。」

コーラン 十四章 二十九節。

真理と絶対的完成を目ざすことは本性の動機や、絶対、純粋な理性に由来するとはいえ、それを把握吸収してしまうことは、一般人には容易なことではない。なぜなら理性は靈魂の光輝であり、しかも靈魂は常に様々の欲望や誘惑にさらされていて、いずれにしても、靈魂は、その中により強固により深くいこもうとする根を持つ対立する様々の附加物や因子に征服されるからである。このために本性や靈魂の種々の欲求は完成追求欲によって指導され、

発展し成長してゆかねばならない。靈魂の持つ明らかな欲求の中には、権力志向、生存の維持および清らかでしっかりとした快樂および安全で健康な環境の獲得ということがある。無制限な富の集積の衝動、人間の自然的生をはるかに超えて数百年も持ちこたえるような構築物強化の衝動、そして名目上の不確かな責任にみちた権力につくための努力、これらのすべては権力と存続と快樂の保持のためであり、人間靈魂の識別力に属するものである。一体、この人間の強力な衝動は無意味なものであろうか？ もしくは、これらの根深く広がった欲求や願望は、はかない自然の上で、物質の囲みの中で実現されるというのであろうか？ はたして、どんなに恋しいものも、愛するものも獲得してしまえばそれでおしまいになり、むしろいやになってしまうということなのだろうか？

純粹でかつ持続する感覺的快樂を動物的生活の中にのみ見出すことができる。そして動物的生活は、人がそこに回帰することに決して満足することのない人間のとおりすぎてゆく場なのである。人間は動物との関連性、その名称や性質が自らにふさわしくない侮辱であると考え。そして自らはより高級で未来に成就する未知なるすべての願望と快樂のために即物的な可感的快樂には目をとじる用意があるとみなしている。それどころか、たとえ長い時間がかかろうとも、その獲得のためには自らを犠牲にする用意があるとみなしている。もしもこのような人間の特性や性質や傾向を無意味なものであると考えるのであれば、創造の秘密の研究解明の根本材料であるところの因果関係、調和、推理の諸原則が根拠を失ってしまう。

人間靈魂のこの本性的衝動と願望にもとづいてイスラームの信条の第二の原理が成立している。イスラームは来世と復活についての信仰と信念（よりすぐれた生活と永遠で人間的な生命への回帰）をつくり出すことによって、また靈魂と自然の証明と証拠によって人間の視界を拡大し、人間をよりすぐれた、より広い生活のために準備させるように努力している。この観点よりすれば、自然で物質的生活は人間の永久な故国とはならない。大地という揺りかごは人間の能力の成長育成の床であるが、人間は自らの素質と身につけ

た能力を基礎にして立ちあがると、そこから遠ざかってゆく。この点から見れば、地球という遊星は旅人の乗り物、過ぎゆく客の旅籠なのである。大地という延べられた食筵、その物質的、精神的恩恵の宴卓から誰もが素質と働きに応じ、より高級な住み家のために利益をうる時、これらすべての恩恵への感謝の気持がその家主（神）の認識と神の意図と計画の実行になってくる、そしてこの計画にしたがって各々が能力に応じて自然の資財の中において生産し占有することになり、必要に応じ正しく消費することになるのである。このような広い視野に立てば、物質的財とそれに由来する生産と分配は、人間的資産と理性と思索を制限拘束するためのなわばり、ということにはならない、むしろ通過と上昇のための道具であり梯子なのである。このことは、対立をひき起す限定された願望から、目的と努力の中に相対的唯神観をもたらしことのできる人間の高貴な希望への志向の方向変換なのである、そしてその結果旅人達は協力者ともなり、共に旅の糧をとり、互いに苦勞を軽減しあい、無知と対立を知り、恐怖を友愛に、戦いを平和に変えるのである。この方向変換によって、人間の欲求の一つである存続における協力が野獸からうけついできたものの一つである存続のための闘争をうめあわすことができるのである。そして、手段であるところの財産が目的と混同されることもなく、それにとってかわることもなくなるのである。個々の人間の信仰と感性に基礎をおくこのような社会を考えることは、技術変革の世紀の経済環境に生れた人々には難しいことである。彼等は生産手段と物質的素材を持つ高圧的政府の中で、呆然自失してしまっている。その結果、人間的価値や人類の本当の要求を忘れてしまっている。そして生活にかかわるすべての事象を経済と階級闘争の観点から見ている。しかも資産の力を非常に高いものとしたがために人間を意志のない道具にしてしまい、生産の手段や技術にひれ伏すようにしてしまっている。このような社会やそれに類したものの観念が人々の意識の中に形成されている場合、先に述べたような社会の実現はより困難である。しかしながら、今日の世界の隅々において権力欲にとりつかれた破

壊者の手がおよばず、彼等のわめき声が聞かれないところでは、平安と清浄と相互協力を見ることが出来る。一体、人類の近代史において政府が出現する以前は、小さな社会においては協力と友愛が支配していなかったであろうか、健全な家庭の小さな環境にはきめ細かな情愛が支配していなかったであろうか？ もしもこのような家庭環境の中や、父と子と妻との間で、その結果が嘘と背信と策略をつくり出すところの拜金本能が人情や愛にとってかわるならば、規則や主義主張でもって、健全で清浄な環境をつくり出すことができるであろうか？ 人間社会とは、家庭環境の拡大したものであるのではないであろうか？ 高貴な預言者達と真実と誠実をそなえた人々の監督と教導にもとづいて出来あがった大小の社会は、健全で精神的な社会実現の可能性を告知している範例そのものなのである。そのもっとも顕著なるものが原始イスラームの社会なのである。— 信仰の光輝が人々の思想を照明しイスラームのカリフ政体が絶対専制体制に変質しなかつた時までは — その時以降、絶対的で強固な権力の周囲に暴虐と違法行為が集中してしまい、イスラームをそれ自らの権力と違法行為の障壁にしてしまい、この障壁のうらがわでイスラームの基本的規定や法令を踏みにじっていたのである。権力の中枢とその代理人達のことは別にして、ムスリム人民大衆を考えてみよう。そして他の社会と比較してみれば、ムスリム達の中では、人権の侵犯、侵害、否定ということは世界の他の人々にくらべてずっと少ないことが認められる。初期イスラームから植民地支配と西欧化の出現にいたる長い時代において、イスラーム世界では他の国々の地主達のような地主による土地所有制は存在したことはなかつたし、他の国々の資本家達のような資本主義は存在したこともなかつた。ムスリムの土地所有者達は西欧および他の国々の土地所有者（封建領主）のように土地と耕作者の絶対的所有者であつたことはかつてなかつたし、またこれらの人々を集団で追放したり、殺りくしたりしたことはなかつた。さらに自分自身が立法者や管理人や裁判官や刑の執行者であることはなかつた。常に少なくともイスラームの信仰と法令が彼等を支配していたのである。同じ

く、ムスリムの資本家達もイスラームの原理と法令に準じて無軌道なことはしなかった。彼らは公然と暴利をむさぼったり資産形成をおこなうことはできなかった。また労働者や農民の自由意志を禁じたりはできなかった。むしろ、その反対に、多くのムスリムの土地所有者や資本家達は大きな善行と奉仕の源であった。慈善施設、病院、寄進設備の設立、橋、寮の建設、生きているうちや死後における困窮者への寛大な救援活動はムスリムの裕福な人々の当然の行為なのであった。

イスラーム諸国では、十字軍戦争および西欧の工業と植民地支配とそのあらゆる分野の影響の発生の前には階級格差・対立がヨーロッパにおいて起るか予測されているようには起ったことはなかった。イスラーム諸国における支配階級とは通常、大土地所有者や資本家にその意味が特定されてはいなかった。多くの場合、この支配階級とは、剣の力によって支配していた抑圧者、自らの力の維持のために国庫を掠奪し浪費していた連中なのであった。

イスラームには現実離れした実現不能の社会経済はない

それはイスラームが人間の実際の様相と能力・資質に目をむけているためである。この視点に立てば、特殊な構造を持つこの人間が社会、経済、歴史の創造者であり実現者なのである。そして、これらの能力と資質はたがいによく結合し組み合わされているために、その各々を個別に観察することができず、その効果を分離して考えることができない程である。たとえば各人が精神的価値を保持しつつも物質的欲望の対象を追求したり、またその逆のことがあるように。こういう理由でイスラームの考え方や法規は人間の欲望から分離した学問的仮説にもとづくものではない。イスラームはその教えと教育及び実践の原則があらゆる側面での人間の地位の向上にあるので、ある一つの特殊な面に独立した視線をむけることはできない。もしも人間の本性を需要と食物、住居の確保、生産という範囲内に限って考察し、生産と分配の道具と

しての人間の本性に着目し、それがこれらの要求や手段に規定されたものに全面的に支配されていると認めるならば、その時には、人間からは独立した経済に関する仮説とその究極的結論到達のための余地が生じる。まさにこの無理解と意識の逸脱が技術の世紀の思想家達を現実には即さない実りの少ない学問的空想にふけらせたのである。たとえこれらの諸説が枝を張り実を結んだにしても、それは一時的で局地的かつ相対的なものである。あらゆる場所としかるべき期間において現代及び未来の人間が求めるものを明らかにしはしないし、常に混迷と意見の対立を増大させるのである。人間の本源的意识や欲望や希望から分離独立した学説や法則は特殊な集団や階級及び特定の時代においてのみ理解と実行が可能なものである。

イスラームはその計画と基礎作業を示す前に思想的基盤を考察し、それを用意する。そして思想を多神崇拜から清め靈魂を不浄から清めることで、靈魂を信仰と敬神で飾る。それから、あらゆる領域における計画（原理と法規）を用意のできた有資格者（聖者と正しき人）の協力を得て実行してゆき、実施の方法を明らかにする。批判者は家の持ち主の意図に注意をむけず、その人の思想や意見の根拠について知らないか、あるいはその一部分を低い水準からとらえてその建造物の一般的構造には目をとじてしまうからである。（たとえば、人々の普通の方法というのは自らのかぎられた見方で、土地の状態や居住者の需要や一般的な諸側面に注意することなく、同情と無知から建造物について、その所有者の目的にそぐわないか、あるいはその全体的構成にかかわりのない意見を述べたりする）。

#### イスラーム法の根拠

社会は、社会的権利と規約を受け入れ、自らはそれに対応して社会的権利と規約に責任を負い、かつ保証する者であると考え、個々人からなりたつて

いる。責任に対する信念の根が深ければ深い程に、社会の基礎は強固である。そして社会集団はそれ自体運動し発達する存在なので社会という生きものが向うところの目標が明らかにされねばならない、そうでなく目標を持って発展しないような社会は存続することができない。この基礎の上に社会は根拠を持つのであり、目標と規則と権利が明確にされる。さらに確定された権利に準じて法が定められ施行されるのである。法の尊厳と実効性は社会を構成する各人の目標に対する信念と理念と良心にうらうちされた責任感に依存している。したがって立法者は、まず第一に個人および社会生活の究極目標について熟知していなければならない、それは進歩と運動のどこかの段階でそれが停止したりしないためであり、またその目標に即した法律が、あらゆる分野の要望を充足させるものであるようにするためである。制限された目標（国民の独立の保障、経済関係とか、それに類したそのものに関するまさきその制約のうちみずから制限されている。したがってそれをこえて、もしなんらかの起動力のある標語が人々の意識をふるいたたせることなく、道を切りひらくことがなければ、決定的な停滞となる。そして社会はよどんだ水のように腐敗し沈滞してしまい、やがては大地の亀裂の中に沈没し自らと同じようなものと結合するか、あるいは空中にのぼって気化してしまうかである。

第二に立法者は人間靈魂の秘密やその欲望や価値を把握していなければならない、それは法源や法律が抱括的であるようにするためである。なぜなら、法律の源泉となるものは権利であり、権利は心理的事象と個人及び存在者との制限された関係のことであるからである。もしも立法者が人間をある一つの角度からながめ、この視点にもとづいて法を定めるならば、人間性の真実を見逃してしまっているうえに、法の枠組の中で人間の進路をわい曲してしまうのである。このわい曲は最初のうちは、蜃気楼の水を水として示すことができるのであるが、結局は道に迷い破滅してしまうことになる。

第三に、立法者は環境や階級や欲求から自由であらねばならない、それは

法がすべての人の利益のために施行され、すべての人をつつみこみ、互いに連帯させるためである。

第四に、社会のメンバーおよび諸階層は法と立法者の権威を信頼しなければならない、それはすくなくとも基本法が自ら実効性を持つためであり、人民の多くが、自らが法の実行に責任があると考えようにするためである。

### 人定法の欠点

通常立法者がどれ程能力があろうとも、また人定法がどれ程委細をつくしたもので表面的には完全なものであろうとも、前述の条件と利点をそなえているものではない。通常個人にはたとえ彼が微妙な心理的事象やそれ由来する要因や現象や権利について知っているとしても、基本法のかたちで法規を制定し整理するということは奇蹟的な作業である。なぜなら立法においては、靈魂の状態や資質、人間の複雑な心情、その特性、徴候、能力の範囲について完璧に把握しておく必要に加えて、野望、コンプレックス、偏向、復讐心および意識的ならびに無意識的観念から自由であることが必要であらねばならないし、そしてこのような条件は普通の人間においては集積されることはないからである。普通の人間はどんなに正しい考えの人であっても心理的事象や環境の作用から自由ではありえない。過去及び現在の願望、習慣、経験が、体得したもの、所有物、心のわだかまりとまざりあい、社会的習慣及び社会関係の形式になり、やがて法となってきたのであるのに、いかにしてその人間が自由でありえようか？ 人定法の一般的害や欠点をいくつかの例を述べることで、生れてこのかたこういう法の鎖にとらわれ、現状しか見たことがなく、しかもそれを信頼していない人に示し、確信させることができるであろう。

一、この人定法の基礎は習慣、経験および社会生活の様々な問題について

の法則と関係形式の発見である。社会的関係形式の発見は現存の固定した自然の特長の発見のようなものではない。このために、現存の固定した人定法は常々あらゆるものの利益にそうすることができない。

二、人定法は過去と現在の社会経済上の特殊な状況に関する経験を基礎にし、変化する未来を見通すことができない。このため、人定法は改変され更新されることになる。しかも、受益者の承知の上で立法を行ない、施行することは階級の固定化と永続化をつくり出し血縁集団の固定化につながる。

三、人定法は、基本的部分も派生的部分も変更、改新されるために、上流貴顕の社会階層が源となって独裁政治の基盤が法の形態をとってくるようになる。そして法による鎖をつくり出す。この鎖や縄をたち切ることは大変むずかしく高価な代償を必要とする。

四、人定法は必然的に複雑な心情や性向と結びついていて、通常、不正をもう一つの不正に、悪をもう一つの悪におきかえる。もしもそれがあつ階級の利益になるとしても、意図しようとするまいと、他の集団や階級の損害となるであろう。

五、このような法は人間の能力と本性、ならびに心理的な均衡や調和の根本に配慮していないために、法と人間の能力、および価値の間で、絶えず不和と対立がある。しかも社会の人員は通常その法の重圧を感じている。そしてなんらかの機会をみつけると、たちまち、人々はその負担から肩を軽くし自由になろうとする。

六、この法は、理性的信仰と良心的責任感と結びついていないので精神的強制力を持っていない。個人や階級の利益や欲求に一致しないような場合は法は無力になってしまう。このために、法と条例の増加に並行して法の実行権についての諸規定も拡充されてくる。そして法実行権についての諸規定と条例のために別な法実行権と司法監視組織が設立される。またさらにこれに附随して同様なことがおこる……

法の実行者が良心的責任感を持っていないので、非常にしばしばすこしば

かりの誘惑や脅迫によって法を破っているし、立法者をあざ笑っているのである。もっと重大な難点は法の実行権力そのものがある特殊な階級を形成し、それが立法者の階級と結託することで災厄、圧政、乱脈の源になっていることである。

人定法の欠陥とその心理的、社会的害は調査しうる範囲をうわまわる程に沢山ある。人類に加えられた損害以上に失われた利益があり、それはいかなる計算によっても数えあげることができない。人類の文化、社会の外貌や表相的現象を観察している人は、まさにこの経験と習慣と模倣の所産である人定法のみが個人と階級の諸関係を社会と文化のかたちで確立していると考えているのである。しかしながら、深い考察と詳細な観察をすれば、個人と社会の有益な所産との間の好ましい関係が倫理と良心的責任感から生れ出たものの一つの側面であることが認識される。そしてもう一つの側面は人間の思惟と表象を超えた原理と法に由来している。文化の究極的根拠は、この種の靈感の上に存立している。いかなる社会においてもこのような根拠が崩壊してしまうと人定法も分解し社会の基本構造がくずれ去ってしまう。社会学の学者や研究者達でこれらの根本原理の模倣者達を、制定者であり創造者である<sup>(注1)</sup>とみなしているような人々も自らこの事実を認めている。

(注1) ジャン・ジャック・ルソーは次のように言っている、「嘘つきやこけおどしの連中の權威が人々を欺き、彼等の中に一時的結びつきをつくり出すことがある。しかしながら実践と叡知のみがこの結びつきを確固としたものとすることができる。ユダヤ教徒の律法はまだ存続している。またイスマーイールの子孫(イスラームの預言者の意)のシャリアは十世紀も昔から人々を支配しているが、未だにそれを集成した偉人達の權威について語りつたえている」と。ヨーロッパの確固不動の基本法はその一部が古代ローマに由来している。ローマは西暦三世紀より以後は閉塞状態を脱し、それ以前の古い法と中東の天界法とを総合しひらかれたものとなった。ヨーロッパは自らの文化をまさにこの基本法の上に基礎をおいた。それからスペインと中東を経てイスラームの立法原理とイスラームの文献をとりこみ、市民生活および社会生活において別な展開をとげたのである。

法は様々の事柄における人間相互の關係に秩序を与えそれを規定するだけのものではなく、またこの諸關係の源は人間の能力や本性であり、しかもこの人間の能力と特性の基本的部分は一時的であるがために、それらの關係や相互の影響を規定し秩序づけている法の原則は一時的で不變のものでなければならない。それはあたかも自然的存在物の自然的特性や動物の本能の限界や行動領域とそこから出てくる結果に秩序があり、限定されているのと同様である。人間もまた、この世界の一部であり、それに由来する現象であるから、行動領域と他との關係におけるその能力と本性の結果も一定の規則によって限定されるはずである。自由の力と自由意志のみが規則や限界を知らず人間生活を紛乱混迷させるのである。

結論は、すなわち人間社会の中に眞實の一時的な正義の關係が存在していなければならないのだが、この基本的關係を発見することはいかなる地位や階位にあつてもその意図にかかわらず心理的状況や諸要素に支配されている人間にとっては容易なことではない。だからといって、人間の諸關係のうちに存する紛乱、混迷、騷擾に屈服しなければならず、さらに人間は完全な理性と自由裁量権を持ち、しかもその部分も全体も理知的で整然たる關係に支配統制されている世界の内にありながら、混乱し迷わねばならず理性と自由裁量権を不幸と迷妄の手段や原因としてのみ考えるべきだと認めなければならないのであろうか。それとも自然的本能的存在全体を直なる整頓された進路にうちすえ、平安を恵んでいるかの永遠なる力が人間に対してもそのもの自らが法と秩序を定め、人間をその発見に導くにちがいないと信じ認めるべきなのであろうか？ このような原理と法の発見への靈感と導きは人間を通じて以外は考えられないことである。このような理解もしくは発見や靈感が可能となる人間の第一条件はすなわちその人間の理性と精神が心理的要素や環境の影響に由来する既成概念や先入観や混乱から解放され、超越し、清められていなければならない。眞、善、福祉以外のものが心を支配してはならないのである。人間にとってのこのような法の必要性およびこのよ

うな人物の存在の必要性は、まぶたに襲いかかる耐えがたい程の光の圧力を中和するために眼球が眉やまつ毛を必要としていることに比較して少ないものではない。現に存在している痛みや苦しみであれ、現に存在していないそういうものであれ、その治療方法が叡知全体のわざのうちにないようなものがあるだろうか？ 新たに起る痛みや苦しみの治療の発見のための持続的な研究はまさにこの真理を示す証しである。

この世界の無限の創造力と存在物の中でも特に人間の最小の要求を把握し充足させるために認められる思惟と実践に関する様々の資質の中における多様性を持ってすれば、このような人物が出現するということとはありえないことでもなく、偶然的でもない。このような人物は特別の性質と特性によって真理（神）の代理人であり舌であり永遠の法と意志とに通じているので、使徒と  
(注1)  
か預言者とか呼ばれるのである。

預言者達は人間の問題を社会経済関係の様相の合間から探究しない、みずからの宣教のはじめにおいてこれに類する原理や計画を布告したりはしない。彼等は靈感と啓示の光のもとで、第一に人間靈魂のこみいった状態とその内的困難に目をむける。事実、もっとも基本的な人間の問題は社会経済の原則や法の欠如ではない。いかに法が真理と正義に配慮をしようとも真理の信仰と良心の責任感に結びついていなければ、個々人があるべき様式に連帯させしかりと団結した社会をつくり出すこともないし、完全な実効性の保証も持つことはないのである。真理と真理に由来する方法への信仰は社会の紐帯であり精神的結合の要因であり、また法の実効性の保証であり後見役である。それはすなわち、すべての立法やあらゆる種類の法や原則の提起の前にこの信仰が、人間の思考と心の中で活動し力を与えなければならない。

(注1) イスラームの学者や求道者達は強固な論証によって特殊な預言者性の必然性と預言者達の靈魂や性格に関する資質や性質、とりわけその習慣や貞潔の性格を彼等の哲学や神学の書物の中で詳しく論証している。ここでは法の考察ということとのかかわりでのみ、

この視点から、このような人物とそういう人々の精神的性質と条件について述べた。

法への信仰の問題を解決する前に人間には別な心理的問題がある。

絶対の真理を把握するには理性の力が微力であること、自然の諸々の力と多様な要求に対して（人間が）無力であり、しかも、人類の能力とそれ由来する法がこれらすべての要素や他の要素にうち負かされ支配されていることが、人間の独立と精神的人格を否定して、さらに、隷属状態にあり自己喪失していながらも、自らを独立した自由なものであると考えるという複雑で重大問題を人類の心の中につくり出しているのである。この病気の治療法やこの問題の解決法は人類の治療能力を超えてしまっている。

預言者は啓示と靈感によって、はじめてこの病気の治療と、内面的でもつれてこみいった問題の解決をおこなっている。唯一神信仰への呼びかけと、絶対的真理の信仰の精神の鼓吹とは人間を神以外のものへの服従の絆から解放し、予断による偏見と人間の苦悩を解決するためなのであった。このようにして預言者達は靈魂の治療とふみにじられた独立の再生をおこなったのである、そして資質と条件のゆるすかぎり彼等は成功したのである。この治療と思考と靈魂の発展と慈愛と善と正義と慈善の精神の覚醒の後に、これらの原理原則に由来するシャリーアと法を一定の時代と環境に合せて説明し、そして真理と絶対的善に対する信仰が進歩し根拠をかため、シャリーアとその根拠の光輝が拡大し、イスラームのシャリーアの中に完成したのである。

以上は全ての預言者の治療の仕方であり方法であってイスラームはそれを完成したのである。この預言者の方法と過去および現在におけるその影響は何人にも明白なことである。今ここで、立法におけるイスラームの方法とその

基礎となるもの、および前提となるもの、そしてその特長について要約をしておく。

- 一、イスラームは理性を絶対的真理にむけ、タウヒードの信仰を強化することで、理性の後進性、靈魂の反動性、内面の問題やわだかまりの治療をおこなった。人定の原則や法には靈魂の内面には入ってゆくすべもなければそれに対する関心もない、それどころか人間の定めた無味乾燥で非論理的な法の力と圧力はできる限り理性を後退させ、偏見をふやそうとしている。
- 二、イスラームは人間を人間への隷属と人間の造った法への隷属から解放する、そして人間を真理であり絶対善である神に服従させる。（このことがイスラームの意味である）、しかし、人定法は慣行や習慣から採られたものであり、慣行や習慣は常に特殊な階級の利益と支配を軸にしているのでより一層しめつけようとする。<sup>(注1)</sup>
- 三、イスラームはその理論と実践の教えでもって真理と善に対する感覚と関心、善行と悪行との識別力、その結果、法の精神の理解を人々の心の中に目覚めさせるようにする。しかしながら階級の利益と習慣に由来する法は人民大衆が一樣に服従するようにするため思考や理解力をうばい去るか、あるいはそういうことに関心を持っていない。

(注1) マルクスは自らの特殊な才能によって、自分や他の人々の展開している経済や社会に関する学説と法則では、目ざす正義も確立されないし階級も消滅しないことをおそらく完全に理解していた。そのため、かかる約束に対する責任から自らを解放し、その約束を歴史の必然性にゆだねている。しかしながら、生産手段の進歩は別な階級をつくり出ししており、かの時代から一步も階級の完全消滅に近づいていない。

- 四、イスラームはその色々な独自の教えによって人間の価値を高め、欲望をかき立てる目標や財への執着に対して人格の支配権と独立を強化し、その結果、事実人間が自らを支配し財の所有者であって、それに所有されるもの

ではないものになっている。この視点より見て、実際には個人と社会の害悪の源泉は私有財産制にあるのではない。問題は人間が執着や財の魅力にとらわれ支配され、その結果、蓄財思想が理性も思考も感情も自らに従属させてしまい、執着の様々の対象によって人間をあらゆる方向へとおい立て、あらゆることをさせることなのである。その逆に、もしも人間が真に所有者であって所有されていないならば、その個人の最善を思い洞察力に富む理性が、自らと他の人との善と利益にかかわるのであるかぎり所有権制や占有に対する関心は適法とみとめられるのである。この問題は経済上の諸問題を改善し改革しようとする人々が完全に見おとしているものである。彼等の原理の説明や法則の設定の中では、これについてなんら関心が払われていないし、彼等が見つけている視角からではこの心理的真理に気がつくのは不可能である。

五、最も重要なイスラームの教えの所産は個人の信仰の不可侵性と個人の集団に対する保証と責任および法とその実践とである。

この心理的治療と律法上の基礎によってイスラームの法令や法律は信仰と信条に結びついた強固な契約の形態となっている。

すでに語ったことに加えて完全なシャリーアおよびそれに由来する法は、法そのものの見地から以下に挙げるような特質や条項をそなえていなければならない。

第一、確定し、普遍的かつ大衆の承認する基本的原則をうちたてなければならない。それは教育の原則と一般的関係ととり決めとが社会に与えている形態を維持するためであり、またその原則にもとづいて法律上の細目が類推され決定されるようになるためである。

第二、承認された上記の基本的原則に由来する法律の細目は現実の状況や事象とに対応性を持っていなければならない。

第三、基本的法規および補足的法規はできるだけより高い目標に到達するために生命的特質すなわち運動発展の機能を持たねばならない。

第四、基本的な法令と法律の補強物ならびに「約束」と「脅迫」がなければならぬ、それは法とそれの正しい運用を保証し、法を欠点や逸脱や改竄から保護するためである。（この特長は原理に対する信仰およびそれに対する心の責任感に追加されるものである。）

はたしてイスラーム以外に社会と経済の原則や規則を人間の高貴な目標や心理的事象や人間の本性にこのように結合させたシャリーアを獲得したことがあるのか、そしてシャリーアの以前とそれ以後における精神的諸問題を癒しえたであろうか？

イスラームは人間の理性と靈魂に関する三つの段階の問題解決および人間の目標と価値に対する信仰の基盤の強化、そしてシャリーアとシャリーアの原理についての一般的かつ本来的目的の説明の後に、聖典の言葉と預言者の慣行と信仰に保証された理性の判断にもとづいて人間の思考が類推と比較の道において活気を得るためイジュティハード（理性的法解釈）の道をあけている。そして、イスラームは法規の実行を責任観念と信仰告白と報償への希望と神罰への恐れ、そして最終的には個別的な諸規定の力で保証している。こういう方法を宗教の源泉でありシャリーアの揺ぎなき基本文献であるコーランの聖句ならびに聖句の成立形式について熟慮することで理解しなければならない。かくしてイスラームは最初にそれ自らに特有の本性にうったえる説明と論証でもって人間を理性の停滞と迷妄の原因であるあらゆる有限な存在者との結合、それへの依存、そしてそれに対する服従からときはなっている。そして神（正義、叡知、絶対的真理）と来世（人間の究極的目標）への信仰をきりひらいている。そして法規の根拠でかつ源泉でもあり、また法令を保護し保証し強化するための法規と法の総体でもある理性と本性の普遍的理念を明らかにしている。たとえば信仰の根拠、敬神、敬虔、正義、公正（学

問的正義)、正しい行為と善行(コーランの聖句の最重要のある部分はこれらの原理を提唱し精神的かつ物質的事象におけるこれらの原理の影響や所産や効力の説明になっている)。この種の理性的かつ本性的普遍原則を解説しそれらを理性に託した後にも、丁度すべての法規や法令や行為について監視が必要であるように、シャリーアの規定と基礎をあらゆる事項に関し絶対的で簡明で、しかも、説明や解説をつけないで(相続法のような特殊なケースを除いて)明らかにしている。このシャリーアの規定と基礎が、正しい慣行の事例とそこから導出された基本理念とともに、神に導かれ、かつ信仰にうらづけられた理性のために、イジュティハードの道を開いておいてくれているのである。これに加え、イスラーム法の視点より見れば、宗教の基本と聖典の言葉に反しないような良い伝統や慣行や良い習慣も保証力を有するのである。

この原理、原則ならびに聖典の言葉と奨励すべき伝統的慣行、さらに理性の優位性と支配力ならびにこれらすべての根拠となるものを基礎としてイスラーム法学は深海のごとき深さと広さを獲得したため、その深みに潜入することは万人に許されることではなくなっている。(特殊な精神的資質と深い思考力を身につけた人を除いて)。これらの根拠と洞察力に富む理性の結合と生けるイジュティハード<訳注-現存する人物が法解釈にあたり理性的推理をすること>(すなわち特に十二イマーム・シーア派の考えでは死者の意見に従うことは許されておらず、ムジュタヒド(法学者)は現に生存している人で、しかも日々増大する出来事とか諸問題ならびにその時代の事件を把握しているものでなければならぬ。)によって、イスラーム法学は常に発展と完成の道をたどってきたし、またそうあらねばならないのである。なぜかというと、あらゆる時代と状況と場所において人々が自らのものとみなし、誠心誠意その細部にいたるまでの規定を実践し、しかもその規範を守りとおす程に、様々の時代や環境や国土のなかにおいても、また思考法や性情の点で大きな相違がある民族や国民のなかにおいても適合するか、あるいは

状態や様相をその規定と法律に一致させるようないかなる立法原理および、それに由来する派生事項や規定も見出すことはできないからである。

幾世紀にもわたって更新される学説や法則の増加と出現、および新たに生じた問題<sup>(注1)</sup>についての法学者の意見の相違の源は、まさにこの豊かな根拠なのである。そしてまさにこのことがイスラーム法が発展していることを証明しているのである。イスラーム法の表面にあらわれ、さらに時としてそれを不完全で不適当と思わせる硬直と停滞は、丁度他の理性的資源や自然的資源と同様にイスラーム法の資源を停滞させてしまったように、近世になってすべてのイスラーム教徒の思想とイスラーム社会に生じた一般的硬直に原因している。なんと多くの逸脱が法の適用において(思想的害を流布する逸脱や天然資源の収奪のように)おこなわれていることであろうか。

(注1) イスラーム法においては長い期間すべての法学者もしくは、大多数の法学者の意見が一致して合意していながら、その後一挙にその見解から離れてしまった問題を見出すことができる。社会的な問題の場合以外で(多数派の考えでは)、イジュティハドの対象となりうる附帯的な問題について、ムジュタヒドは自らのイジュティハドによって他人の法令を拒否したり承認したりすることができる。特に、大多数のイスラームの学者は法規は実際の利益や損失に対応するものと見なしている(アシュアリー派は別である)。したがってムジュタヒドにとってもしも、なんらかの利益と判断されるならば、たとえ同時代の人々や過去の人々の見解と相違することがあってもその見解を発表することができる。

イスラーム経済の基礎

および その法的根拠

イスラームは、初めて社会と個人の一般的関係と特殊的关系についての普遍的原理と目的を、これらの関係の究極的目的および結果とともに明らかに

しているといわれた。それから、原則と規定をこの原理と目的に基づいて制定している。これらの原理・原則から導出される規定と細かい条項は精神的、物質的、個人的、社会的関係と目的に準じ多様である。ここで問題としてとりあげるものは、かの所有権の原則とそれに由来する経済的關係である。コーランの聖句と正しい慣行に照して、次の原則は妥当で信頼出来る。すなわち、所有権は相対的でかつ制限されている。なぜなら、所有権の意味は占有の選択権と能力ということだからであり、人間の能力と選択権とは制限されているので人間は自らを絶対的所有者、完全に自由な占有者とみなすことはできない。このような絶対的能力と完璧で強力な占有権は人間およびすべての存在者を創造し、しかも常にそれらを自ら占有している神にとってのみ存するのである。それ故、人間の所有権は、人間に与えられた賢い意志と理性と選択権と自由に規定されている。「言え。おおアッラー、王権の主。あなたは御望みの者に王権を授け、御望みの者から王権を取り上げられる。」(コーラン、三章二十六節)。「また(かれの)大権には共有者もない御方。」(十七章百十一節)

このような聖句は、唯一神信仰者をして常にそれ自体かこの者の一部であるところの世界がいつも強力な権力の占有のうちにあり、所有者とはまさしく神であるという事実に気づかせ覚めさせるのである。コーランにおける他の聖句も大地とその資源が神に由来し、神がそれを人に委ね、人間がこれらのものの専用において神の代理者となっていることを明らかにしている。

「また大地を生あるもののために設けられた」(コーラン五十五章十節)。「あなたがたのために大地を臥所とし、」(コーラン二章二十二節)、「アッラーは地上の凡てのものをあなたがたに従わせ、」(コーラン二十二章六十五節)「それから、われらの後に、この地をあなたがたに継がせた。」(コーラン十章十四節)。「かれこそは、あなたがたを地上の継承者となされた方である。」(コーラン三十五章三十九節)。

これらの聖句ならびにそれに類するものの内容は地上において人間が神の代

理者であることを明らかにし、この代理者が主人の命令と意向を実行するようになっている。

「あなたがたの中で信仰して（財産や技能や労力を）使用する者、かれらには偉大な報奨があろう。」（コーラン五十七章七節）、「なお、アッラーがあなたがたに与えられた資材の一部をかれらに与えなさい。」（コーラン、二十四章三十三節）、「またあなたがたの財産と子女を増やし。」（コーラン、十七章六節）、「あなたがたの財産や子女を増やし、」（コーラン七十一章十二節）。「かれらはわれが、財宝と子女でかれらを力付けると考えるのか。」（コーラン、二十三章五十五節）、「われがあなたに与えていたものを、凡て背後に残してきた。」（コーラン六章九十四節）。

これらの明らかな聖句は絶対的所有は神のみであり、神こそがこの権利を代行権として（自らの継承者として）人間に与え（贈与）、扶助し（生活を続ける力）、手わたした（所有者としての占有権の委託）のである。

またコーランは明々白々と大地の主を神としている。「アッラーの大地は広い」（コーラン三十九章十節）。「アッラーの大地で放牧（せよ）」（コーラン、七章七十三節、十一章六十四節。）

コーランの言葉から理解されるこの原理（相対的で制限された所有権）により、どれほど占有権を行使しようとも、またいかようにそれを行使しようとも、人は大地とその資源とそこからの収穫について絶対的かつ完全な占有権をもつ所有者とはならないのである。事実上、財は神の財であり、人間は神の代理人で神の下僕なのである。

さらに別の観点からすると、この代行権はすべてのものにとって存在しているのであるから、個人は集団の代弁者であり代理人なのである。個人の占有権は大衆の善と利益に準じていなければならない。このような見地から、所有権は制限され、限定され、借用上、委託上のものなのである。この見解と対立するものに絶対的で、自由で生得的で、しかも無制限無条件な所有権（理念）があり、その考え方からこの所有権理念の基礎を精神と目的の中で

強化し、さらにそれが崇拜の対象となってしまうことが生じている。その結果、時として「財」と「経済関係」がすべての精神ならびに社会の事象の創造者で実現者であると見なされるようになっていく！

ところで、前記の基本的原理に、資産と所有権の構造に関する根本規定が由来している。

(一) 大地と天然資源はだれかある人物が特に所有しているものではない(個人のものでも、社会のものでもない)。ただイスラーム教徒の指導者(イマーム、ワリー・アムル)が大衆の利益に配慮して大地とその資源を監督する(恣意的な自由の原理と私有権の否定は条項や特別条件の中に入れていない)。

(二) 個人は有益な占有権行使と生産的行為であるかぎりにおいて大地とその天然資源の利用について私的かつ制限された権利を持ち、生産物についての所有権を持つものである。

(三) イスラーム法は所有権の保有とその源である利益をうむ行為について特別の規定と条件を持っている。

(四) 天然資源(完全な取得物)は個人や特殊な階級の占有や恣意の下におかれてはならない。またある人が特別の条件によって他の人がそれを利用するのを妨害することはできない。

(五) 財の交換および財の評価の手段である通貨や金属は個人の手の中に集中し退蔵されてはならない、それはそうすることによって権力を獲得し生活必需品が権力の所有者の恣意の下におかれ、労働と分配の自然で公正な状態が混乱してしまうからである。

(六) イスラームの原則と規定の定めるところでは、現金や物品に関する個人の収益がきめられた額の限度に達した場合、あるいは一定期間のうちにそれが増加した場合、直接的で固定した税(ザカート、五分の一税)が、それに賦課される。

(七) イスラームの監督者(イマーム、ワリー・アムル、ナワーブ)は大衆

の利益にかんがみ財に対する占有権ならびに徴税権および土地と天然資源に対して税の限度を決定する権利を有する。

(八) 非合法な行為(利子、賭博、くじ)もしくは有害な物品や無益な物品から得られた利益や財は所有権の対象とはならない。

(九) 狂人や白痴は自らの財産に関して占有権を持っていない。

(十) 無駄で有害なもののために消費することを個人にも社会にも禁止している、すなわちこの禁止そのものが無制限で非合法的な富の集積を禁じているのである。

以上が所有権と経済関係に関するイスラームの普遍的かつ原則的規定であり、その詳細は出典を示しこれから述べることにする。

これらの規定の源およびこれらの規定を監視し支配しているものは、上記の原則よりも、コーラン、スンナ、理性および慣行に由来する諸原則である。たとえば「あなたがたの間で、無駄にあなたの財産を浪費してはならない」<sup>(注1)</sup>(コーラン第二章、百八十八節)という原理、さらに「あなたがたの中の、<sup>(注1)</sup>富裕な者の間に専らわたらせないためである。」(コーラン第五十九章、七節)の原理、「アッラーから保管を委託された財産を、精神薄弱者に渡してはならない」<sup>(注2)</sup>(コーラン第四章、四節)の原理。

(注1) (この聖句の中における「無駄に」(di-l-bātil)という語は無意味に、不毛の、生産的でなくと言う意味である。また「あなたがたの間で」(baynakum)という語および「あなたがた」(kum)という人称代名詞を反復しているのはおそらくだれもが権利と資格に応じて財を使用するようにするために財が一面において公共共有の権利の対象とならねばならぬということを示しているのであろう。

(注2) 取得物(一般的天然資源)が富裕者達の間で先どりされないように、という意味である(この聖句は戦利品に関するものであるが、この基本原理の明らかにしていることは公共の富が特定の階級に専有されてはならないということである。

(注2) この聖句の中で財をすべての人にとって生計の手段であると規定し、財を愚かに用いるものにあたえてはならないとしている。

「約束を守りなさい。」(コーラン第五章、一節)の原理。「イスラームにおいては損失も損害もみとめられない」の原理(預言者のハディース)「必要とあっても禁じられたものを公共の財とは認めない」の原理(ハディースもしくは理性的判断と慣行にもとづく)。大多数のものの損失を防ぐため「少数、特殊者の損失の禁止」の原理(理性的判断と慣行にもとづくもの)。「信者は、禁じられたもの(ハラーム)を許してしまうとか、あるいは許されたものを禁ずるといような条件でなければ、自らのきめた条件にしたがうのである。

これらの基本的規定や立法上の原則や理性的原則やそれに由来する細項目の総体が信仰と実行力にうらうちされて財政上、経済上の規約として具体化するのである。以上が所有権と経済関係に関する法規の原則およびイスラームの原則的規定の要約である。この原則と規定ならびに本性と実際に一致した一般的法規および個別的法規によれば、個人は自由で独立していて、しかもその誘因が物質的必要物とそれへの執着であるところの精神的、肉体的能力・資質の発揮という面では制限もされず自由が否定されてもいない。しかしながら、この自由は財の使用と集積およびそこからの収奪という分野では特別の規定と秩序と公益の範囲の中に制限され抑制される。それは富の集中や搾取が起らないように、また特権的専制的階級が発生しないようにするためなのである。

この二つの思想、すなわち所有権に関する絶対的自由(資本主義)とそれの反対、個人的所有権の絶対的禁止(共産主義、社会主義)は技術とその環境の突発的変化の世紀に個有のものである。この視点からみると、この二種類の経済体制はともに相入れないし調和しない。いずれかをうけいれれば一方は排除される。そしてうけいれられた体制のすべての附帯的現象に服従しなければならぬ、すなわち絶対的自由であれば、その結果としての現象は搾取、抑圧、富の集中、特権的資本家階級と労働者の窮乏の発生であり、個

人的所有権の否定であれば、その結果としての現象は自由と個人の独立の制限とそれに附随して特殊階級による独裁政治ということになる。それゆえ、個人的所有権を許す体制はいずれも、それに附帯する現象を承認し、また公共的もしくは国家の所有権を承認する体制では、いずれにせよ、それに附帯的な現象に服従しなければならないことになる。

この二つの相対立する思想は、特殊な時代と環境に個有のものであり、一方が他方の反映であるので、その時代と場所以外では、いかなる場所においても完全なかたちで実現実行されたことはない。（資本主義諸国では、徐々に資源と産業が国有化・共有化されており、また、共産主義世界では、程度の差こそあれ、土地・小工場についての個人的所有権が合法化されてきている）。現実には、工業と生産手段上の問題解決に関して一世紀前にあらわれた思想は、別の社会原理の進歩と出現、そして技術の急速な発達、労働者の減少と製品の増加について、究極的解決を予測していなかったし、予測することもできなかった。

実際には経済的問題は  
あらゆるところで常に三つの  
主題に関係している

一つは、生活の基本的要求や需要を保証するところの大地とその天然資源に対する所有権の関係様式である。（技術、物資、工業製品は一般的には次のレベルに属しており、それらは天然資源を増進し、より一層利用させるためのものである）  
（注1）

（注1） 大地、天然資源、それから出てくる産物は生物の生活の源であり第一的手段であり、さらに（水、空気、食物、住居）という生活の基本的要求を保証している。土地

所有権とその富の収奪と分配の自然で公正な解決は、常にどこでも経済上の諸問題のもう一つの解決の鍵になっている。進化し強力な資本主義の突然の出現は、大部分は農民と遠隔地に対する海賊的手段による掠奪により人々の手に渡った違法な土地と富の所有権の結果でありまた副産物である。産業の発生の後では、これらの富の維持と監視のもっとも容易な手段はまさにこの産業機構である。

このために、資本はこの方向に進歩をとげ、農民は都市に集中した。このこと自体が経済上ならびに社会上の危機の源となり、識者の注目をひいたのである。産業資本主義の諸問題の理解とその解決法、たとえば企業の国有化あるいは労働者の賃金ひき上げ、また都市の環境と権力の集中のなかでそれを実施することは土地と天然資源の現状の（理解と解決法より）容易である。

次に人間の本性的欲望に由来する個人の独立と自由の保証の方法という問題がある。この自由は経済環境にも社会環境にもかかわってくる。以上二つの問題につづいて貨幣の流通をいかに整理するのか、またそれにもとづく経済力の集中発生をいかに防止するかという問題が、あらゆる場所と時代を通じての問題の一つになっている。技術と物品の生産と分配の資本主義の環境の中に生ずる錯綜混乱は以上三つの基本的な難問に由来する。もしも実践の自由、天然資源の使用、ならびに交換手段としての貨幣の流通の基礎が真理と正義という本来の根拠のうえにおかれているのならば、工業生産物およびその生産と分配に関する難問は、この基礎にもとづいて定められた法や規則によって解決するのである。

イスラームに個有の思想はこの三つの問題の公正で自然な解決を企図している。すなわち、社会の構成員が自由で、しかも他者の権利を侵害することがない程度に、自らの身体的能力と世界の自然的恩恵を利用し、彼等が大地の資源と生活必需品に困窮することなく、有益で合法的である思想的、芸術的、肉体的活動の領域で、自らの労働の所産を所有し、占有し、そして、貨幣が蓄財と収奪と権力的手段とならないようにするのである。

これらの問題については、既に述べた法源や基本的法規のほか、派生的

法規とイスラーム法の根拠となる特別な典拠もある。